「聖典を開く会」現代語訳（一）

我聞きたまえき　かくのごとき。

わたしが聞かせていただいたところは、次のようである。

一時、仏　王舎城耆闍崛山の中に住したまいき。大比丘衆、万二千人と俱なりき。

あるとき、釈尊は王舎城の耆闍崛山においでになって、一万二千人のすぐれた弟子たちとご一緒であった。

一切の大聖、神通すでに達せりき。

みな神通力をそなえたすぐれた聖者たちで、

その名をば、尊者了本際・尊者正願・尊者正語・尊者大号・尊者仁賢・尊者離垢・尊者名聞・尊者善実・尊者具足・尊者牛王・尊者優楼頻螺迦葉・尊者伽耶迦葉・尊者摩訶迦葉・尊者舎利弗・尊者大目　連・尊者劫賓那・尊者大住・尊者大浄志・尊者摩訶周那・尊者満願子・尊者離障・尊者流灌・尊者堅伏・尊者面王・尊者異乗・尊者仁性・尊者嘉楽・尊者善来・尊者羅云・尊者阿難と曰いき。

そのおもなものの名を、了本際・正願・正語・大号・仁賢・離垢・名聞・善実・具足・牛王・優楼頻羸迦葉・伽耶迦葉・那提迦葉・摩訶迦葉・舎利弗・大目犍連・劫賓那・大住・大浄志・摩訶周那・満願子・離障・流灌・堅伏・面王・異乗・仁性・嘉楽・善来・羅云・阿難といい、

みな、かくのごとき上首たる者なり。

教団における中心的な人たちばかりであった。

また大乗のもろもろの菩薩と俱なりき。

また、大乗の菩薩たちともご一緒であった。

普賢菩薩と妙徳菩薩となり。

すなわち、普賢・文殊、

慈氏菩薩等のこの賢劫の中の一切の菩薩に、また賢護等の十六の正士ありにき。

弥勒など賢劫の時代のすべての菩薩と、さらに賢護などの十六名の菩薩、

善思議菩薩・信慧菩薩・空無菩薩・神通華菩薩・光英菩薩・慧上菩薩・智幢菩薩・寂根菩薩・願慧菩薩・香象菩薩・宝英菩薩・中住菩薩・制行菩薩・解脱菩薩なり。

および、善思議・信慧・空無・神通華・光英・慧上・智幢・寂根・願慧・香象・宝英・中住・制行・解脱などの菩薩たちとである。

みな普賢大士の徳に遵って、もろもろの菩薩の無量の行願を具し一切功徳の法に安住せり。

これらの菩薩たちは、みな普賢菩薩の尊い徳にしたがい、はかり知れない願と行をそなえて、すべての功徳を身に得ていた。

十方に遊歩して権方便を行じ、仏法の蔵に入りて彼岸を究竟し、無量の世界において現じて等覚を成じたまう。

そしてさまざまな場所におもむいて、巧みな手だてで人々を導き、すべての仏の教えを知り、さとりの世界をきわめ尽し、はかり知れないほどの多くの世界で仏になる姿を示すのである。

兜率天に処して正法を弘宣し、かの天宮を捨てて、神を母胎に降す。

まず、兜率天において正しい教えをひろめ、次に、その宮殿から降りてきて母の胎内にやどる（第一受胎）。

右脇より生じて現じて七歩を行ず。

やがて、右の脇から生れて七歩歩き、

光明顕曜にして普く十方無量の仏土を照らしたまう。

やがて、右の脇から生れて七歩歩き、その身は光明に輝いて、ひろくすべての世界を照らし、数限りない仏の国土は

六種に震動す。

さまざまに震動する。

声を挙げて自ら称う。

そこで、菩薩自身が声高らかに、

「吾当に世において無上尊となるべし」と。

「わたしこそは、この世においてこの上なく尊いものとなるであろう」と述べるのである。

釈・梵、奉侍し、天・人、帰仰す、

梵天や帝釈天は菩薩にうやうやしく仕え、天人や人々はみな敬う（第二出生）。

算計・文芸・射・御を示現して博く道術を綜い群藉を貫練したまう。

そして菩薩は、算数・文芸・弓矢・乗馬などを学び、ひろく仙人の術をきわめ、また、数多くの書籍にも精通し、

後園に遊んで武を講じ芸を試みる。

さらに、広場に出ては武芸の腕をみがき、

現じて宮中、色味の間に処して、

宮中にあっては欲望の中に身をおく生活をするのである。（第三処宮）

老・病・死を見て世の非常を悟る。

やがて、老・病・死のありさまを見て世の無常をさとり、

国の財位を棄てて山に入りて道を学したまう。

国や財宝や王位を捨てて、さとりへの道を学ぶために山に入る。

服乗の白馬・宝冠・瓔珞、これを遣わして還さしむ。

そこで乗ってきた白馬と身につけていた宝冠や胸飾りを御者に託して王宮に帰らせ、

珍妙の衣を捨てて法服を着る。

美しい服を脱ぎ捨てて修行者の身なりとなり、

鬚髪を剃除したまい、樹下に端座し勤苦したまうこと六年なり。

行、所応のごとくまします。

髪をそって樹の下に姿勢を正して座り、六年の間、他の修行者と同じように苦行に励む（第四出家）。

五濁の刹に現じて群生に随順す。

塵垢ありと示して、金流に沐浴す。

五濁の世に生れ、人々にならって煩悩に汚れた姿を示し、清らかな流れに身をきよめるのである。

天、樹の枝を按して池より攀出することを得しむ。

すると天人が樹の枝をさしのべて池から岸にあがらせる。

霊禽、翼従して道場に往詣す。

美しい鳥は左右に取りまいてさとりの場までつきしたがい、

吉祥、感徴して功祚を表章す。

天の童子は菩薩がさとりを開くめでたい前兆を感じて草をささげる。

哀みて施草を受けて仏樹の下に敷き、跏趺してしかも坐す。

菩薩はその心を汲んで草を受け取り、菩提樹の下に敷き、その上に姿勢を正して座る。

大光明を奮って、魔をしてこれを知らしむ。

そして体から大いなる光りを放つ。それを見て、今まさに菩薩がさとりを開こうとすることを悪魔は知るのである。

魔、官属を率いて、来りて逼め試みる。

悪魔は一族を率いてきて、そのさとりの完成をさまたげようとする。

制するに智力をもってして、みな降伏せしむ。

しかし菩薩は智慧の力でみな打ち負かし（第五降魔）

微妙の法を得て最正覚を成る。

ついにすばらしい真理を得て、この上ないさとりを成しとげるのである。（第六成道）

釈・梵、祈勧して転法輪を請じたてまつる。

そのとき梵天や帝釈天が現れて、すべてのもののために説法するように願うので、

仏の遊歩をもって、仏の吼をして吼す。

仏となったこの菩薩はあちらこちらに足を運び、説法を始める。

法鼓を扣き、法螺を吹く。

それはあたかも、太鼓をたたき、法螺貝を吹き、

法剣を執り、法幢を建て、法雷を震い、法電を曜かし、法雨を澍ぎ、法施を演ぶ。

剣を執り、旗を立てて勇ましく進むように、また雷鳴がとどろき、稲妻が走り、雨が降りそそいで草木を潤すように、教えを説き、

常に法音をもって、もろもろの世間に覚らしむ。

常に尊い声で世の人々の迷いの夢を覚すのである。

光明、普く無量仏土・一切世界を照らし六種に震動す。

その光明は数限りない仏の国々をくまなく照らし、すべての世界はさまざまに震動する。

すべて魔界を摂して、魔の宮殿を動ず。

この光明は魔界にまで及び、魔王の宮殿をも揺り動かすのである。

衆魔、慴怖して帰伏せざるはなし。

そこで悪魔どもはみな恐れをなして、降伏してしたがわないものはない。

邪網を掴裂し、諸見を消滅す。

このようにして世間の誤った教えをひき裂き、悪い考えを除き去り、

もろもろの塵労を散じ、もろもろの欲塹を壊し、法城を厳護して法門を開闡す。

さまざまな煩悩を打ち払い、貪りの堀を取り壊すのである。正しい法の城を固く守って広

く人々に法の門を開き、

垢汚を洗濯して、清白を顕明す。

煩悩の汚れを洗いきよめ、

仏法を光融して、正化を宣流す。

ひろく仏の教えを説き述べて、人々を正しいさとりの道へ導き入れるのである。

国に入りて分衛して、もろもろの豊膳を獲、功徳を貯えて福田を示す。

また、人里に入って食を乞い、さまざまな供養を受け、施しの相手となって人々に功徳を積ませ、

法を宣べんと欲して欣笑を現ず。

教えを説くにあたっては笑みをたたえ、

もろもろの法薬をもって三苦を救療す。

人々の悩みに応じてさまざまな教えの薬を与え、その苦しみを除く。

道意無量の功徳を顕現して、菩薩に記を授け、等正覚を成り、

さらにさとりを求める心を起こさせてはかり知れない功徳を与え、菩薩には仏となることを約束してさとりを得させるのである。（第七転法輪）

滅度を示現すれども、拯済すること極まりなし。

菩薩は最後に世を去る姿を示すのであるが、その後も教えは人々を限りなく救うのである。

諸漏を消除し、もろもろの徳本を植え、功徳を具足すること微妙にして量り難し。

さまざまな煩悩を除き、多くの善根を与え、余すことなく功徳をそなえていることは実にすぐれており、はかり知ることができない。（第八入涅槃）

諸仏の国に遊びて、普く道教を現ず。

菩薩はまた、諸仏の国をめぐってまことの教えをひろめる。

その修行するところ、清浄にして穢れなし。

その修行するところは清らかで少しも汚れがない。

たとえば幻師の、もろもろの異像を現じて男とならしめ、女とならしめ、変ぜ

ざるところなし、本学明了にして意の所為にあるがごとし。

幻を見せる術にたけたものが、男の姿や女の姿、その他さまざまな姿を思いのままに現すように、

このもろもろの菩薩もまたまたかくのごとし。一切の法を学びて、貫綜・縷練す。

所住、安諦にして、化を無数の仏土に致さずということなし。

このもろもろの菩薩たちも、一切衆生を教化する法を学び、それを極め尽くし練り上げて、その法に安住し、教化のいたらないところはない。

みなことごとく普く現ず。

そして、無数の国土に身を現わして、

未だ曾て慢恣せず。

少しも倦むことなく、

衆生を愍傷す。

あまねく衆生をいたみあわれみたもうのである。

かくのごときの法、一切具足せり。

菩薩はこのように衆生を教化するためのすべての手だてを余すことなくそなえている。

菩薩の経典、要妙を究暢し、妙称普く至りて、十方を導御す。

また、菩薩は大乗経典の要めをきわめつくし、その名声はあまねく十方に聞こえて衆生をことごとく導き、

無量の諸仏、みな共に護念したまう。

数限りない仏がたは、みなともにこの菩薩をお守りになる。

仏の所住の者、みなすでに住することを得たり。

菩薩は仏のそなえておいでになる功徳をすべてそなえ、

大聖の所立はしかもみなすでに立す。

仏の清らかな行いをすべて行う。

如来の導化は、おのおのよく宣布して、もろもろの菩薩のためにしかも大師と作る。

そして、仏と同じようにその導きはよく行きとどいて、おのおのよく教化し、もろもろの菩薩のために大導師となり、

甚深の禅慧をもって衆人を開導す。

奥深い禅定と智慧で人々を導く。

諸法の性を通り、衆生の相に達せり。

すべてのものの本質をきわめ、すべての人々のありさまを知り尽し、

明らかに諸国を了って、諸仏を供養したてまつる。

すべての世界のすがたを見とおしており、いたるところに身を現してさまざまな仏がたを供養するが、

その身を化現すること猶し電光のごとし。

その速やかなことはちょうど稲妻のようである。

善く無畏の網を学び、暁かに幻化の法を了る。

教えを説くにあたり、何ものも恐れない智慧をそなえ、すべてのものは幻のようで、決して執着するべきでないという道理をさとり、

魔網を壊裂し、もろもろの纏縛を解く。

さとりの道をさまたげる悪魔の網をひき裂き、さまざまな煩悩を断ち切っている。

声聞・縁覚の地を超越して、空・無相・無願三昧を得たり。

そして声聞・縁覚などの位を超えて、空・無相・無願三昧を得て、

善く方便を立して、三乗を顕示して、この中下において滅度を現ずれども、また所作なし、また所有なし。

また人々を救う手だてを施して、声聞・縁覚・菩薩の三種の教えを説く。声聞や縁覚を導くためにひとまず世を去る姿を示すのであるが、菩薩自身としては、すでに修めるべき行もなければ求めるべきさとりもなく、

起せず滅せず、平等の法を得たり。

起すべき善もなければ滅ぼすべき悪もなく、みな平等であるという智慧を得て、

無量の総持・百千の三昧を具足し成就す。

すべての教えを記憶する力と数限りない三昧と、すべてを知り尽す智慧を欠けることなくそなえている。

諸根・智慧、広普寂定にして深く菩薩の法蔵に入る。

仏の華厳三昧を得、一切の経典を宣暢し演説す。

そこで説法のよりどころとなる禅定に入って、深く大乗の教えを知り、尊い華厳三昧を得て、すべての経典を説き述べるのである。

深定門に住してことごとく現在の無量の諸仏を覩たてまつる。

一念の頃に周遍せざることなし。

また、菩薩自身は深い禅定に入り、今おいでになる数限りない仏がたをまたたく間にすべて見たてまつることができる。

もろもろの劇難ともろもろの閑・不閑とを済いて、真実の際を分別し顕示す。

そして苦難に深く沈んでいるものも、仏道修行のできるものもできないものも、それらをみな救って、まことの道理を説き示す。

もろもろの如来の弁才の智を得、もろもろの言音を入って、一切を開化す。

しかも如来の自由自在な弁舌の智慧を得ており、またあらゆる言葉に通じていて、どのようなものをも教え導くのである。

世間のもろもろの所有の法に超過して、心常に諦かに度世の道に住す。

すでに世間の迷いを超え出て、その心は常にさとりの世界にあって、

一切の万物において意に随いて自在なり。

すべてのことがらについて自由自在である。

もろもろの庶類のために請せざる友と作る。

さまざまな人々のためにすすんで友となり、

群生を荷負してこれを重担とす。

これらの人々の苦しみを背負い引き受け、導いていく。

如来の甚深の法蔵を受持し、仏の種姓を護りて常に絶えざらしむ。

さらに、如来の奥深い教えをすべて身にそなえ、人々の仏種性を常に絶やさないように

守り、

大悲を興して衆生を愍(あわ)れみ、慈弁(じべん)を演(の)べ、法眼(ほうげん)を授く。

大いなる慈悲の心を起して人々を哀れみ、その慈愛に満ちた弁舌によって智慧の眼を授け、

三趣を杜(ふさ)ぎて、善門を開く。

地獄(じごく)や餓鬼(がき)や畜生(ちくしょう)への道を閉して人間や天人の世界への門を開く。

請せざる法をもってもろもろの黎庶(れいしょ)に施(ほどこ)すこと、純孝(じゅんきょう)の子の父母を愛敬(あいきょう)するがごとし。

すすんで人々に尊い教えを説き与えることは、親孝行な子が父母を敬愛するようである。

もろもろの衆生において、視(みそな)わすこと自己のごとし。

まるで自分自身を見るように、さまざまな人々を見るのである。

一切の善本みな彼岸に度す。

菩薩たちは、このようなすべての善根によって人々をさとりの世界に至らせ、

ことごとく諸仏の無量の功徳を獲、智慧聖明(しょうみょう)にして不可思議なり。

仏がたのはかり知れない功徳をみな人々に与えるのである。その智慧の清く明らかなことは、とうてい思いはかることができない。

かくのごときらの菩薩、・大士、称(あ)げて計(かぞ)うべからず。

一時に来会(らいえ)せりき。

このようなすぐれた菩薩たちが数限りなく集まり、この経を説かれた集いに臨んだわけである。